

私達の青春は灰色だった。 そして物資不足の中の結婚式

八女郡立花町 春口 律子

青年団の1人が出征されることになり、その方を先頭に久留米の高良山まで、女達8人でお参りすることにした。昔はどこに行くにも歩いていた。朝早くから出発するが、年上の方達は和服を着て、私達はモンペをはき、ひたすら歩き続けて二軒茶屋まで行き、それから右に折れ農道を行き、高良山の坂道を登る。武運長久を祈りに来られた方々の旗も社殿に供えてあった。帰りに八女市で写った写真を眺めていると、2人故人になられている。町に出ても食料難で、何一つ食べる物は見当たらない。

田舎には何かあるだろうと、祖母の遠縁の方が男の子を連れて来られた。その頃、おやつ代わりに小麦粉と麦かすを混ぜて薄くのぼし、中に味噌を少し入れて焼いただけの物をお客様に出したら、「こんな麦かすでもいいから分けて下さい」と言われ、祖母は、一升ますで小麦粉と麦かすを一升袋に入れてやりながら「しばらくこれでも食べて命をつないでいると、南瓜も食べられるようになるから」と、嬉しいにつけ悲しいにつけ、祖母がお念仏を唱えるのをよく聞いた。私達は家の者も食べるのがないのに、やらんでよかと陰でぶつぶつ言っていたのに「あのくらいでも上げていたのでよかったね」と、祖母の気持ちも分からず、辛かったに違いなかった。食べる物がない時にそれを切り抜けられたことは、今からどんな困難な事が起きようと私達は乗り切ることができると思う。

終戦後の日本の繁栄は、目を見張るものがあるが、食糧や物資の不足は影も形も消えてしまい、そんなことを今の者達にどんなに話してもわかるはずもない。「欲しがりません勝つまでは」「我等はみんな力の限り勝利の日まで」などと誰もが迷うことなく信じて耐え忍んだ。戦場に男達を送り、女達は老いも若きも本土決戦に備えて竹槍の訓練に励んだ。校庭に作られた薫人形に向かって突き進むのである。教官は「まだまだ声が小さい。そのくらいでは敵は倒されんぞ」と叱咤される。竹槍の先を鋭く削って万全を尽くす。ある日、奥山の上空に落下傘で人が降りたようだとの報らせに20人程の村人が集まり、竹槍をかついで向かう途中で敵機ではなかったことがわかり引返した。たとえ敵であれ、人を竹槍で突くなんて正常では考えられないことだった。こんな田舎の純朴な人達まで変えてしまう戦争の恐ろしさを思い出している。国を守るのは銃後の私達でということで、「焼夷弾恐るるに足らず」と新聞に書かれ、食事中に屋根を突きぬけてきた焼夷弾をおひつの中に入れて外に投げ出したとか、こたつ布団に包んで投げやったとか、主婦達の武勇伝のように取り上げられた。夜も空襲があり、野焼きをした残り火に焼夷弾を投下し、空から無数に落ちて行く灯を見ながら、家の中の電燈の光りが漏れていないかと確かめる。高良台から探照燈の光りが幾筋も長く伸びて夜空を照らし、敵機襲来に備えていた。

父や兄弟を戦地に送り、家庭を守る主婦達は、次から次へと出征される方の千人針を作り上げ、一針一針お願いしますと家を回り、出征される日が近づいて間に合わない時には虎年の方に縫っていただく。年齢の数だけ縫ってもらうので大助かりだった。虎は千里の道も駆ける生命力を持つと言われ、無事帰還されることを千人針に託したのだった。

炭焼き兵隊さん

昭和18年頃、近くの小学校に30人ばかりの兵隊さんが講堂を宿舎にして炭を焼き、ガソリンの代用として使うと言う。小学校の裏山の雑木林まで道も無く、石ころだらけの坂道を、出来上がった炭をかついで下りてこられる。始めて山の仕事をされる若い兵隊さんは痛々しかった。切羽詰まってから燃料に炭を使うとは、口にこそ出さないが誰もが不安な気持ちだったようだ。

私達でさえ食糧に事欠いているのに、兵隊さんは何を食べて仕事をされるのだろうと話していた。30戸余りの家々を、野菜等を集めに回られる。大きな籠の中には、気の毒なくらいの物しか入っていなかった。山ぶき、細い筍、みょうが等お腹の足しにもならない。大きな鍋に塩汁を煮立て、らっきょうの葉をざく切りにしてどっさり入れられる。『のびる』と間違えられたと後で聞いた。物が無いと言っても、今の人達には想像もつかないだろうが、おかずを作るのに塩までなくなったので5km程の道を歩いて少し探してきたと炊事軍曹殿は汗をふきながら話された。

女子青年ばかり10名で宿舎に慰問にでも行こうかと思立ち、小麦粉を持ち寄って、塩味のふな焼きを持って行った。人数が多いので一切れづつくらいしかなかったが、とても喜んで下さった。皆で歌でも唄おうと言われたが、軍歌ばかりの中に、その頃のはやりの勘太郎月夜唄、湯島の白梅等はすさんだ心をしばし和ませてくれる青春の歌でもあった。その頃、毎日何人か宿舎を出られて本土防衛の任務に着かれると言われ、残り少ない兵隊さんにお別れに言った。「今まで短い期間でしたが、この村が思い出の地になりました」と話しながら、急に腰の剣を抜き小指に傷を付けられ、思わず差し出したハンカチに血をにじませて手渡された。山合いの小さな集落に炭焼きに来られた兵隊さん、今でもお元気ですか。私がまだ16才の頃の記憶をたどっています。

集落に1台くらいしかないラジオの前で臨時ニュースを聞き、仕事も手につかず、一ヶ所に集まっては不安な日を過ごすようになった。家の前の3号線を武装した軍用トラックが慌ただしく走り去っていく。急に私達の前に車が止まり、下士官らしい人が降りてきて、「皆さん、今、沖縄では激戦が続いています。九州に上陸するのも間近に迫ってきたようです。自分たちも敵を迎えうち潔く死ぬ覚悟です。皆さんも大和撫子の名に恥じないよう国のために散って下さい」と熱のこもった一言一言を聞きながら、勝利の日までを唱え頑張ってきたのに、刀折れ矢尽きた思いがして、死という言葉をおそれることなく受け入れることができました。それからは、友達とどんなにして死のうかと真剣に話す日が続いた。毎日のように空襲警報発令が出

され、その日も近くの防空壕に走り込み、もうその時にはB29の黒い巨体は編隊を組んで、南東の空から迫っていた。爆音のすさまじさに、耳を押さえて息をのんで見詰めていた。もはや迎え撃つ戦力も失ったのだろうか。その時、急に友軍機が後を追うように飛んできたかと思うと、青空にいくつもの白い煙が広がり、爆発音と共に大きく旋回しながら煙を引いて落ちて行った。ひたすら国を思う一途の心と、一機で敵に立向かった勇敢さ、若かったろう一飛行士の無念さを思い壕の中から祈りました。それから誰言うことなく、落ちた場所は八女市祈祷院あたりだったと聞きながら、40数年の月日が流れ、いつの日にかこの目で確かめて訪れて見た。星野川にかかる大橋から入り込んだ所に水天宮があり、裏の土手を歩くと、高さ60cm程の墓標が見えます。

昭和19年11月21日

故陸軍中尉 今田良三

於 九州戦死 行年30才

碑の前には新しい花が供えてあり、なぜか救われた思いがした。角のおばさんにお聞きすると「毎年のように、お母様がお参りされていましたが、見えなくなりました。ご高齢のようでしたから。山口県のお方のようにでしたよ」と話された。悪夢のような出来事がきのうのように思い出される。水の季節になると水天宮祭りがあり、ひっそりと立つこの碑の事は、戦争を知らない子供達にこの事実を伝え、いつまでも平和が続くことを祈りたいと思います。

